

清末日本語教育における音声教育についての研究

発表者：魏維（広島大学大学院生）

0 発表の流れ

- 1 はじめに
- 2 清末日本語教育の位置づけと分類
- 3 清末の日本語教科書からみる音声教育
 - 3-1 独学の日本語学習活動における音声教育
 - 3-2 清末本土における東文学堂の日本語音声教育
 - 3-3 『日本語教科書』からみる清国留学生の日本語音声教育
 - 3-4 『日語讀本』からみる近代学堂における日本語音声教育
- 4 まとめ

1 はじめに

日清戦争後、敗戦を迎えた清国は日本をモデルにして近代化を学ぶためには、日本語を勉強しなければならないと確信した。清政府は 1896 年に日本に 13 名の留学生を派遣した後、1897 年京師同文館・広州同文館に東文館を設置し、清国本土における日本語教育の幕が開いた。一方、張之洞、梁啓超をはじめとする民間の知識人は日本語の習得を積極的に呼びかけていた。結果として、日本語が西洋文化への近道であると確信する学習者が急増し、日本に赴く留学生も増加していった。また、近代教育政策の実施に伴って、日本語も近代学堂の科目として行われていた。

これまでの清末日本語に関する研究は、歴史的な視点から分析するものがほとんどであった。しかしながら、日本語教師や日本語教科書などが完備されていない状態から始まった清末の日本語教育が如何にして実施されたかは明らかになっていない。特に、今日のコミュニケーションを目的とする言語教育と異なり、読書・翻訳を目指す清末の日本語教育において、音声教育に対する観念や教育方法がいかなる形で行われていたのかを究明する必要がある。したがって、本発表では清末に行われた全ての日本語学習活動を日本語教育の一部として捉え、当時の日本語音声教育に注目する。清末日本語教育における音声教育の実態を探る一方で、様々な形で行われた日本語音声教育の特徴を明らかにする。

2 清末日本語教育の位置づけと分類

まず、近代日本語教育における清末日本語教育の位置づけについて触れておく。関正昭

(1997) は『日本語教育史研究序説』で日本語教育史を次の3つの時期に分けている。

- 一、外国人主体の日本語学習・日本語研究の時代（19世紀末以前）；
- 二、「侵略的」日本語普及教育の時代（19世紀末～1945年）；
- 三、国際交流のための日本語教育の時代（戦後～現代）。

このように、『日本語教育史研究序説』では19世紀末から1945年までの日本語教育は「侵略的」と意味付けられている。中でも、清国本土より2年間ほど先行した台湾を始めとする植民地における「国語教育」が代表として取り上げられる。しかし、ほぼ同時期に清国人自らの意思により始まった清末の日本語学習活動も存在していた。それだけではなく、「日本語教育史年表」では1895年から1911年までの時代において、台湾における日本語教育の開始（1895）、清国留学生13名の受け入れ（1896）、東本願寺や東亜同文会による東文学堂の設立などについて触れられているが、京師同文館・広州同文館で開設された東文館（1897）、『和文漢読法』の出版（1900）、近代学堂における日本語教育の実施などについては一切言及されていない。要するに、植民地における日本語教育が近代日本語教育史の主流として位置づけられる反面、清国政府や清国人が主導権を持って行った自発的な日本語教育活動や清国本土における日本語教育活動がすべて除外されている。

そこで、本発表は清末の日本語教育は清国人自ら主体的な意思によって始まった日本語学習活動であるという側面を重視しつつ、清末の日本語教育を近代日本語教育史の一部として捉える。具体的には、先行研究を踏まえ、清末の日本語教育を「独学の日本語学習活動」、「清国本土における東文学堂教育」、「清国留学生の日本語教育」、「近代学堂における日本語教育」に分類し、それぞれ使用された日本語教科書あるいは学習書を通して、当時の音声教育の実態を考察する。

3 清末の日本語教科書からみる音声教育

表1 本稿使用した清末の日本語教科書

	書名	著者	出版年月	出版社・出版地	使用された学堂
独学の日本語 学習活動	『和文漢読法』	梁啓超・羅普	1900	勵志社・東京	
	『寄学速成法』	林文潜	1901.12	寄社・温州	
東文学堂の日 本語教育	『日語入門』	長谷川雄太郎	1901.2	善隣書院・東京	広州同文館東文 堂
	『日語独習書』	郭祖培・熊金寿	1903.7	東文学堂・大阪	金陵東文学堂
清国留学生の 日本語教育	『日本語教科 書』	松本亀次郎など	1906	金港堂書籍株式会 社・東京	宏文学堂
近代学堂の日 本語教育	『日語讀本』	内堀維文	1909	上海商務印書館	山東師範学堂

3-1 独学の日本語学習活動における音声教育

3-1-1 『和文漢読法』

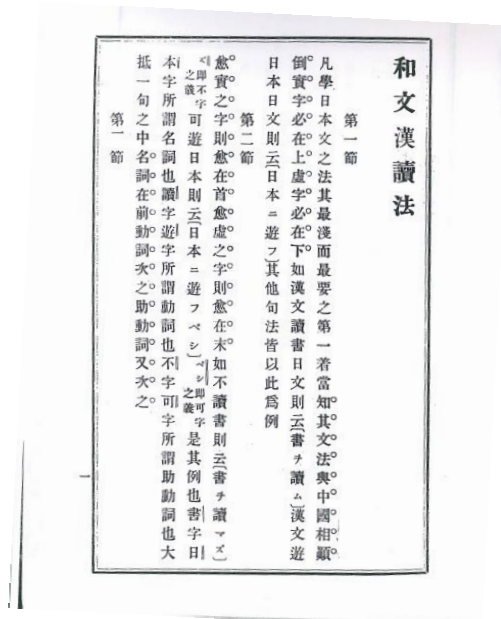


図1 『和文漢読法』

* 『和文漢読法』は学習者に、日本語の発音を省略して文字と文法のみを指導する本であったと言える。むしろ、発音をあえて文字から分離して、文字と文法のみを教える内容であったと言っても過言ではない。

3-1-2 『寄学速成法』における音声教育

【資料1】『寄学速成法』第一章 緒言

日本文字、原出於中国、故書中漢字十居六七、假名十不過三四耳、日本本国字謂之假名…日文雖十之六七用漢字、而漢字之音韻、則與中国異、如国讀クニ、家讀イエ是也、学譯日文者、必將舉漢字而改讀音韻…

(日本の文字は中国から伝わってきたため、文中には漢字が6、7割を占めている。仮名文字は3、4割程度しかない…日本文において、漢字の使用率は6、7割であるが、漢字の読み方は中国語と異なる。例えば、「国」は「クニ」、「家」は「イエ」と読む。和漢訳者は必ず漢字の読み方を変えなければならない…)

表2 『寄学速成法』の五十音図

キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア	片假名
---	---	---	---	---	---	---	-----

き	か	お	え	う	い	あ	平 假 名
𪛗	𪛘	𪛚	𪛜	𪛞	𪛠	𪛢	變 體
愷 意	哭 嚇	我	唉	烏	意	嚇	京 音
克 以	卡	屋	哀	烏	伊	阿	杭 音
克 以	坑	汪	哀	烏	伊	挨	甌 音

＊ 反切法

＊ 直接表音法

【資料 2】字之音韻、務必口授、今姑注以京音及杭甌音焉、講譯學者、無籍於音韻、不妨任以一種音識之也

(字の音韻は必ず口授しなければならない。今は北京音、杭州音、温州音でつけているが、翻訳者は、音韻に拘らずいずれの音でも弁別して構わない)

3-2 清国本土における東文学堂の日本語音声教育

3-2-1 広州同文館の『日語入門』

【資料 3】日本の音は率ね出気の音にして、支那音には入気の音多きゆえにや、兎角入気と呼ぶの癖あり、又清濁の辨別明ならず、是れ支那音より来る自然の癖なり、而して五十音中最も発音に苦しむ者は、「ナニヌネノ」「ラリルレロ」の二行にして、此二行は同音に出でて殆ど辨別し難し、而して転呼音、即ちハをワとよ読み、ヘをエと読むの類並に異字同音即チテフ・テウ・チョウ・チャウ皆チョウと読み、カウ・コウ・カフ・クワウ皆コウと読むの類は最も至難を感じ、翻て又「ワキウエヲ」の如き、皆能く十分の其音を発せり、而して日本に在てはキエ兩字の如き、他のイエと一様の発音となり居れば、反て其正しき音を改めしめざるを得ず、例へば、鳥居にトリキと読法を示すときは、彼等はトリウイと発音し、絵紙にエガミと読法を示さば、日本人には反て何事なるかを解す可らず、此等の類甚だ多く、一々記述し難し。

長谷川雄太郎・「清国広東同文館」1897 年『教育公報』

＊ 清濁の混淆や異字同音の発音に悩まされていた

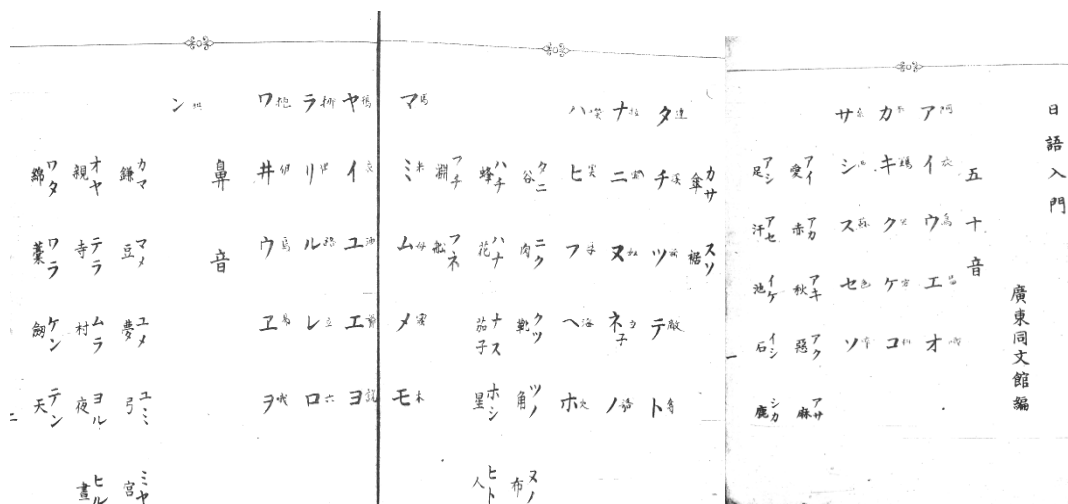


図3 『日語入門』の五十音図

* 直接表音法

3-2-2 金陵東文学堂の『日語独習書』

ン	ワ	フ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
鳥	挖	拉	牙	哈	那	他	撒	卡	阿
ニ	井	リ	イ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
鳥	屋	里	衣	夫	呢	氣	細	苦	以
之	ウ	ル	ユ	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
反	屋	路	又	夫	奴	次	絲	苦	鳥
切	エ	レ	エ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	屋	例	爺	夫	聶	貼	寫	給	葉
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	臥	勒	約	摸	諾	托	所	課	餓

図4 『日語独習書』の五十音図

* 直接表音法と反切法の併用

* ローマ字で表音

【資料4】「毎片假字下注以漢字、均清國江寧省音居多、並注以英文字音、學者如稍通英文、互參之可無舛訛」

(すべての仮名文字の下に、南京語による漢字とローマ字と両方を用いて表音している。英語が多少分かる学習者は両方を参考すれば、誤読を避けることができる)

【資料5】『日語独習書』第一章の「五十音」と第四章の「温習一」

第一章 五十音

ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ
 サ シ ス セ ソ タ チ ツ テ ト
 イチー アサ朝 イト絲 キシ岸 イケ池
 カキ柿 キタ北 カサ傘 シタ舌 テツ鐵
 アサイ浅 アカイ紅 アツイ厚 カタイ硬 タカイ高
 應用 アサイイケ浅的池 アカイカキ紅的柿
 タカイキシ高的岸 カタイテツ硬的鐵

...

第四章

温習一

アナタ您 ワタクシ我 アノヒト他
 アナタガタ你们 ワタクシドモ我们 アノヒドラ他们
 キモノ衣服 オビ帯 タビ（足袋）襪子
 「ノ」之的

例題

アナタノキモノ你的衣服 ワタクシノタビ我的襪子
 アノヒトラノオビ他們的帶 アノヒトノフデ他們的筆
 ワタシドモノフネ我們的船

和訳演習

我的傘 ワタシノカサ 你们的筆 アナタカタノフデ
 他的船 アノヒトノフネ

* 音声知識の部分：仮名文字・単語・例文

温習の部分：単語・例文・翻訳

3-3 『日本語教科書』からみる留学生の日本語音声教育

* 清国留学生向けの最初の受け入れ先：宏文学院

【資料6】例言の第一条：「此ノ書ハ、假名ノ發音ヨリ始ム。其ノ他音ト、混同シシテ、會得シ易カラシメタリ」

日本語教科書 第一卷	
目次	
第一課	片假名 五十音
第二課	練習
第三課	ヤトナ ム ト
第四課	ナ ト ク
第五課	鼻音及ビ練習
第六課	半假名
第七課	濁音
第八課	濁音ノ練習
第九課	及ビナ行トノ比較
第十課	『ナ行ト』
第十一課	半濁音及ビ練習
第十二課	長音
第十三課	長音ノ練習
第十四課	拗音
第十五課	拗音ノ練習
第十六課	拗濁音
第十七課	拗濁音ノ練習
第十八課	拗長音
第十九課	拗長音ノ練習
第二十課	促音及ビ練習
第二十一課	轉呼音
第二十二課	カ行ノ鼻濁音ト普通ノカ行濁音

図5 『日本語教科書』の目次

			第二十二課									
			カ行ノ鼻濁音ト普通ノカ行濁音及ビナ行トノ比較									
ミ	カ	キ										
ノ	ネ	ヌ										
ミ	カ	キ										
の	ね	ぬ										
ミ	カ	キ										
ゴ	ゲ	グ										
み	か	き										
こ	け	く										

カ	タ	ゴ	ゲン	グン	ガイ	ガ						
ニ	ナ	テン	ン	ン	コク	ギ						
カ	タ	ゴ	ゲン	グン	ガイ	ガ						
ニ	ナ	テン	ン	ン	コク	ギ						
カ	タ	ゴ	ゲン	グン	ガイ	ガ						
ニ	ナ	テン	ン	ン	コク	ギ						
カ	タ	ゴ	ゲン	グン	ガイ	ガ						
ニ	ナ	テン	ン	ン	コク	ギ						
カ	タ	ゴ	ゲン	グン	ガイ	ガ						
ニ	ナ	テン	ン	ン	コク	ギ						

図6 『日本語教科書』の第二十二課

- * より正確な発音能力を期待している
- * 漢音を借りて発音する方法を避ける

3-4 『日語讀本』からみる近代学堂における日本語音声教育

- * 内堀維文 山東師範学堂

【資料7】『日語讀本』の「例言」

「日本文字讀法有音訓二種、各課所掲新語、屬音讀者旁注片假名、屬訓讀者旁注平假名、以示區別。課文内先用片假名、而後平假名者、由易及難也、及後漸進則多用平假名間用片假名以便熟練。」

(日本語の発音は音読、訓読二種類があつて、各文に挙げられた新語について、片仮名で示す語は音読で、平仮名で示す語は訓読で注音して区別する。また、本文では、最初に片仮名を使用するが、その後平仮名を使うようにしている。それは易から難へ進むという趣旨である。それで漸進して平仮名を使いながらも片仮名も使用することによって、熟練させる。)

- * 音読と訓読。
- * 先行した片仮名教育を踏まえ、練習を繰り返しながら片仮名を導入するような指導方法である。

4 まとめ

- (1) 短期間で日本語を習得したいという日本語学習者の要求を背景として、『和文漢読法』のような速成法を指導する日本語学習書が編纂され、音声教育が軽視されるようになった。
- (2) 『寄学速成法』では「日本語の文字に直接表音法と反切法を併用し、漢音を使って

日本語の発音を学ぶという方法が当時の発音学習法として使用されていたことが分かる。また、『寄学速成法』では三種類の方言で表音している点から、方言による漢音の差異が日本語の発音学習に与える影響が考慮されていたことが確認できる。

- (3) 『日語入門』の著者である長谷川雄太郎は日本語教育を実施する際にすでに日本語の発音に注目していたが、教育経験を積み重ねた結果、漢字を借りて直接表音法で日本語の発音指導を行う方法が有効であると考えた。また、教科書における単語例の分量から発音の練習にも重点を置いていたことが確認できる。
- (4) 『日語独習書』では、日本語の表音表記について、複数の方言で直接表音法や反切法を使用するほか、ローマ字の表音法も用いられた。
- (5) 『日本語教科書』には、表音表記が付されていないことから、教育現場で日本語の発音を口授するという教育方針が取られていたことが窺える。
- (6) 教育現場から生まれた日本語教科書である『日語讀本』は文字の読み方を重視し、音声知識と文法知識を取り込んだことが確認できる。

本発表では清末に使われた日本語の学習書や教科書を通して、僅か十数年間の間に異なる形で展開した日本語教育に関して、特に音声教育に対する意識や指導方法に注目して考察してきた。しかし、当時の音声教育に関する史料の収集がまだ十分であるとは言えず、清末日本語教育における音声教育の史実を体系的に把握できたわけではない。さらに史料を収集し、近代日本語教育史における清末日本語教育の空白を埋めることを今後の研究課題とする。

参考文献

- 1 内堀維文 (1909) 『日語讀本』 上海商務印書館
- 2 汪向荣 (1991) 『清国お雇い日本人』 朝日新聞社
- 2 王昇遠・唐師瑶 (2008) 「蔡元培の東文觀與中国日語教育—從紹興中西学堂到南洋公学特班」 『中国大学教学』 2008 年第 3 期
- 3 上沼八郎 (1987) 「内堀維文と山東省師範学堂」 『国立教育研究所紀要・お雇い日本人教習の研究—アジアの教育近代化と日本人』 第 115 集 pp. 65-73
- 4 郭祖培・熊金寿 (1903) 『日語独習書』 東文学堂
- 5 魏維 (2015) 「清末日本語教育に関する研究の必要性」 『比較日本文化学研究』 第 8 号 pp.105-119
- 6 工藤浩 (2013) 『日本語要説』 ひつじ書房
- 7 高曉芳 (2007) 『晚清洋務学堂の外語教育研究』 商務印書館
- 8 吳洗凡 (1965) 「晚清先進人士林文潜」 『溫習文史資料』 第七輯 pp. 214-218 溫習市政协文史資料委員会編
- 9 関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク
- 10 鮮明 (2011) 『清末中國人使用的日語教材——一項言語學史考察』 中央編訳出版社
- 11 張之洞 (2002) 『近代文献丛书 勸学篇』 上海書店出版社
- 12 長谷川雄太郎 (1897) 「清国広東同文館」 『教育公報』 第二百号 帝国教育会
- 13 長谷川雄太郎 (1901) 『日語入門』 善鄰書院

- 14 平野日出雄（1982）『日中教育のかけ橋—松本亀次郎』静岡教育出版社
- 15 松本亀次郎など（1906）『日本語教科書』金港堂書籍株式会社
- 16 南勇（2007）「近代中国の言語意識と日本語—中国留学生が編纂した初期日本語教科書をめぐって」『成城文藝』198号 pp. 49-24
- 17 吉田則夫・劉建雲（2010）「清末中国の日本語教育水準を代表する教科書—郭祖培・熊金寿著『日語独習書』—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第144号 pp. 63-74
- 18 李小兰（2006）「清季中国人編日語教科書之探析」『杭州師範学院学報』第4期 pp. 97-102
- 19 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』学術出版社
- 20 梁啓超・羅普（1900）『和文漢読法』勵志社
- 21 梁啓超（1936）『飲氷室合集』上海中華書局
- 22 林文潜（1901）『寄学速成法』寄社